

【研究ノート】

アイヌ語の「猫」

—特に日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言への借用について*

落合 いずみ

要旨：アイヌ語北海道方言には猫を表す形式の1つとして *cape* (チャペ型) があり、八雲、沙流、美幌、宗谷といった地域において報告されている。このチャペ型については、橘 (1936) に述べられているように、日本語東北諸方言からの借用であるというのが通説である。青森県、秋田県、山形県に亘ってチャペという形式が猫の意味で用いられている。この形式は津軽海峡を渡り、日本語北海道方言でも函館方面において猫として用いられている。しかし、チャペ型の借用の方向が、アイヌ語北海道方言から日本語東北諸方言ではなく、日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言であったことについて、その根拠を示して論じた文献は管見の限り存在しない。そこで本稿では、チャペ型の借用の流れが日本語東北諸方言から、または日本語東北諸方言から同形式を導入したと考えられる日本語北海道方言函館下位方言から、アイヌ語北海道方言に導入されたであろうことを地理的分布、アクセント位置などから考察する。また、日本語からアイヌ語に導入された猫を表す形式として *neko* または *meko* (ネコ型と呼ぶ) もある。これらの形式もまた、チャペ型と同様に日本語東北諸方言から借用された可能性が高いことを述べる。

キーワード：日本語東北諸方言、アイヌ語、猫、借用

1. はじめに

橘 (1936 : 254-276) は、日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言へ借用された語彙を23例挙げた論考である。例えば、*hiraka* 「下駄」や *icari* 「策」などが挙げられている。その中に、動物名が2つ見られる。1つは *peko* 「牛」である。橘 (1936 : 262) は「牛」を表す形式が日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言へ借用された経緯について「アイヌには牛が無いから、ベコは東北諸方言から這入ったものに違ひない」と述べている。橘 (1936 : 262) が、日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言に借用されたと考える形式の中には動物を指す物がいくつかあるが、*cape* 「猫」もその1つである。ただしこの *cape* については *peko* 「牛」の例のような、新たな動物の導入経路に絡めての借用の方向についての考察は述べられていない。本稿は *peko* 「牛」と同様に、*cape* 「猫」も日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言へと導入された、または日本語東北諸方言の影響を受けた日本語北海道函館下位方言を介してアイヌ語北海道方言へ導入されたことを主張する。さらに、アイヌ語諸方言には *neko* または *meko* という形式も日本語から借用されているが、これらもまた日本語東北諸方言から導入された可能性を主張する。その前に、次節では日本語東北諸方言に見られる「猫」の形式について、先行研究を紹介し、それらをまとめた考察を提示する。

2. 日本語東北諸方言等において猫を表す形式とその考察

橘 (1936 : 262) はアイヌ語に借用された *cape* という形式の借用元と考えられる形式として、以下 (1) のように肥後 (熊本) を含む様々な日本語方言から例が挙げられている¹⁾。この中でアイヌ語に借用された形式に最も類似するのが一番目と二番目に挙げられたチャッペとチャペ (ともに太字で表示) である。

- (1) チャップペ (津軽・秋田)、チャペ (秋田の小児・山形)、チャンペ (上総)、チャメ (山形)、チョボ (上総)、チャンコ (上総)、チョイ (長野)、チャコ (秋田・山形)、チャッコ (秋田)、チャチャ (秋田の小児)、チャツチャ (秋田)、チョッコ (山形)、チョコ (越後)、ヂョコヂョコ (越後)、チョンチョン (肥後の幼児) 等

さらに橘 (1936 : 263) は、これら日本語諸方言において猫を表す形式は「猫を呼ぶ聲から来たものである」と説明を加えている。そして、猫への呼びかけ語についても日本語諸方言から例を挙げている。以下 (2) のようにこれら呼びかけ語のどれもが上の例のように「チャ」または「チョ」という音声から始まることが特徴である。

- (2) チャーチャチャチャ (秋田縣鹿角郡、山形縣東田川郡)、チョチョ (越後吉田町)、チョマ又はチョマヤママヤ (遠江)、チョンチョン (肥後南の關)

これらの中、肥後地方に見られるチョンチョンという形式は猫を表す語としても、猫への呼びかけにも用いる語としても登場している。これに関連し、徳川 (1989 : 1461) には、猫を呼び寄せる時の語として、以下 (3) のような類似の形式が挙げられている²。

- (3) チャーチャー (秋田縣鹿角郡)、チャコチャコ (山形縣北村山郡)、チャップペ (青森縣津軽)、チャペチャペ (山形縣)、チョーチョー (山形縣西置賜郡、福岡縣久留米市)、チョコ (愛媛縣喜多郡)。

ここで2つのことに注目したい。1つは青森縣津軽地方で猫を呼び寄せる語として用いられるチャップペである。もう1つはチャップペの語末にある「ペ」の要素についてである。チャップペという形式は(1)では同地域において猫を表す語として登場している。そして山形縣で猫を呼び寄せる語として用いられるチャペチャペという形式である。この形式は明らかにチャペを重複した形式であり、(1)では同地域においてチャペという形式が猫を表す語として登場している。そのため、チャップペ、チャペ、チョンチョンなどの猫を表す語が、猫を呼び寄せる語から来ていることは確からしい。

橘 (1936 : 263) はチャペという形式の語尾である「ペ」という部分についても考察している。(1)の中には、山形縣で用いられるとされるチャメという形式がある。それに類似の形式として、秋田縣 (幼児が用いる語として挙げられている) と山形縣で用いられるチャペという形式がある。このチャペに近似した形式として、青森縣津軽地方と秋田縣で用いられているチャップペという形式がある。チャメからチャペへの変化について、橘 (1936 : 263) は「八丈島・栃木縣・茨城縣では、猫メ、牛メ、蟻メ、鳩メ等と、動物にメを付ける癖がある。チャメのメは、けだし是である。そのチャメがチャペとなり、東北人からアイヌに伝えられたのだらう」という。ここでは日本語諸方言の側での変化の最終段階としてチャペのみ挙げられているが、類似の形式であるチャップペも含まれると考える。

松木 (1982) は青森縣津軽方言の辞書であるが、その 269-270 頁で青森縣津軽方言において猫または猫の愛称を表す形式としてチャペまたはその異形態としてチャップペを挙げている。そして、この形式の語尾の「ペ」について以下のような考察を述べている。「ペはチップペ (小さい者)、イナカッペ (田舎兵衛) などのペと同様で、者、人などの意を表す接尾

語。小さい愛らしいものという意味である」。松木の挙げた「ペ」の付く例を見ると、語根に対して単に「ペ」(-pe)が付くのではなく、促音の入った「ッペ」(-ppe)が付いているようである³。

橘(1936:263)と松木(1982:269-270)の考察をまとめると、チャペまたはチャッペの語尾にある「ペ」は接尾辞ということになる。そして、これは松木(1982:269-270)によると、小さい愛らしいものという意味を持つ⁴。ちなみに風間(2021:362)では当該接尾辞を動物昆虫名接辞と呼んでいる。

ここまで、日本語東北諸方言において猫を表す語であるチャペまたはチャッペについて、その由来が猫を呼び寄せる語であること、語尾のペは小さいものを表す接尾辞であることなどについて先行研究をもとに述べてきた。上の(1)には日本語諸方言における類似の形式が挙げられているが、アイヌ語の*cape*と比較した場合、形式上もっとも類似しているのが、このチャペまたはチャッペである。

次に、チャペまたはチャッペが用いられる東北地方の諸方言について、それらが東北地方の中でもどこに偏っているのかを見ていく。橘(1936:263)が挙げた(1)によると、チャペまたはチャッペが用いられるのは青森県津軽地方、秋田県、山形県である。佐藤(2004)による日本語方言辞典においても猫の項目の中にチャペまたはチャッペという形式が挙げられている。それぞれの形式が用いられる地域を表1にまとめた。そして、図1はそれらチャペまたはチャッペという形式が用いられる地域を分布図として示した。

表1 日本語東北諸方言におけるチャペまたはチャッペ

	チャペ	チャッペ
橘(1936)	秋田、山形	青森県津軽、秋田
佐藤(2004)	青森県津軽、青森県上北郡、秋田県、山形県	北海道函館、青森県上北郡、青森県津軽、秋田県仙北郡、山形県西村山郡、山形県西田川郡



図1 チャペまたはチャッペの語彙を収集した北海道および東北地域の地理的位置

チャペまたはチャッペは本州では東北地方に分布するが、その中でも、青森県、秋田県、山形県の3つの県に限られる。青森県を除けば、東北地方の中でも日本海側に分布していることがわかる。太平洋側の岩手県や宮城県にはこれらの形式は見られない。北海道では函館にこの形式が見られる。これは、青森県、秋田県、山形県におけるチャペまたはチャッペの形式が、津軽海峡を渡って北海道に導入されたためと考えられる。東北三県の中でも、地理的な近さや歴史的な関連の深さに鑑みれば青森県津軽地方から導入された可能性が高いだろう。

ちなみに佐藤（2004）には山形県飽海郡において猫を表す形式としてチャメが挙げられている。この形式の語尾に現れる「メ」は、橘（1936：263）が八丈島、栃木県、茨城県などで「猫メ」という表現に見られるとする語尾の「メ」と同一の接尾辞だろう。（1）に挙げたように、橘（1936：262）も山形県においてチャメが用いられるとしている。橘（1936：262-263）の考察を採用すれば、チャメからチャペに変わったことになるが、山形県には両形式が存在している。チャメからチャペへの変化は山形県で起こり、チャペが山形県以北に伝わった可能性が高い。

ここまで日本語東北諸方言において猫を表す形式であるチャペまたはチャッペについて見てきた。これらの形式が見られるのは東北地方の中でも青森県と、日本海側の秋田県、山形県に限られ、北海道においても函館にこの形式が見られることがわかった。アイヌ語には日本語東北諸方言からの借用語が見られるとのことであるが、日本語東北諸方言の話者が函館に渡り、函館において行われた日本語東北諸方言とアイヌ語北海道方言と接触することで、日本語東北諸方言がアイヌ語北海道方言に取り入れられた可能性もあるだろう。次節ではアイヌ語諸方言において猫を表す形式を検討する。

3. アイヌ語における「猫」の様々な形式

表2はアイヌ語諸方言において猫を表す形式をまとめたものである⁵。データの出典は服部（1964：185）による『アイヌ語方言辞典』の「猫」の項目からである。アイヌ語は現在では日常生活において使用されることはないが、旧来活発に話されていた時代の方言区分では、アイヌ語北海道方言、アイヌ語樺太方言、アイヌ語千島方言の3つの方言があるとされる（Fukazawa 2019：3）。表2の幌別から名寄まではアイヌ語北海道方言における各地方の下位方言のデータを示している。下位方言の地理的分布については後述の図2を参照されたい。表2の樺太は樺太方言のデータ、千島は千島方言のデータである。アイヌ語諸方言における猫を表す形式のデータを分析すると四つの型に分けられることがわかった。それらがネコ型、チャペ型、コスク型、そして形式なしである。表2ではそれぞれの方言における形式がどの型に属するのかに分類して示している。なお、形式なしの型は服部（1964：185）に挙がっている表現をそのまま示した。「ずっと昔はいなかった」、「言わない（昔はいなかった）」、「ない」などのバリエーションがある。

まず、ネコ型についてであるが、これには *neko*（アイヌ語北海道方言帯広下位方言、アイヌ語北海道方言八雲下位方言）と *meko*（アイヌ語北海道方言幌別下位方言、アイヌ語樺太方言）という2つの形式が見られた。アイヌ語諸方言におけるネコ型の形式は、日本語において猫を表す語であるネコからの借用であることは明らかである⁶。橘（1936：263）もアイヌ語北海道方言に見られる猫を表す形式についてチャペの他に、「メコとも言ふが、是もネコの訛である」と述べている。アイヌ語諸方言において、恐らく日本語と同一形式の *neko* が初めに導入されただろうが、アイヌ語北海道方言帯広下位方言、アイヌ語北海道方言八雲下位方言においては語頭子音の *n* が *m* に変わり、*meko* となった。

次に、チャペ型である。日本語東北諸方言におけるチャペまたはチャッペと同一の形式と見なされる。この型はアイヌ語北海道方言八雲下位方言、アイヌ語北海道方言沙流下位方言、アイヌ語北海道方言美幌下位方言、アイヌ語北海道方言宗谷下位方言に見られる。このうち、アイヌ語北海道方言八雲下位方言は、猫を表す形式としてネコ型とチャペ型の両方を持つ。アイヌ語北海道方言美幌下位方言では、語末母音の *e* が、何故かは不明だが

i に変わり、*capi* となっている。

アイヌ語北海道方言宗谷下位方言では語中に二重子音を伴った *cappe* という形式で現れる。前節では、日本語東北諸方言において猫を表す形式がチャペまたは促音の入ったチャッペであったことを述べた。そして松木（1982）が青森県津軽方言において小さいものを表す「ペ」という接尾辞が挙げられているが、本稿ではこれを「ッペ」と考えた。また、松木（1982）には津軽方言においてチャペとチャッペの両者が用いられているとの記述があった。アイヌ語北海道方言において *cape* と *cappe* の両形式が見られるが、チャペ型が日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言に導入された当初、促音を含まない形式であるチャペと促音を含む形であるチャッペの両者が自由交替形として導入されたのかもしれない。

3つ目の型はコスク型である。これはアイヌ語千島方言にのみ見られた。表2の *kosuku* という形式は鳥居（1903）に用いられているアイヌ語の表記であるが、これは音声的に正確であるとは言い難い。それでも *kosuku* 「猫」がロシア語において猫を表す形式である *кошка* (*koshka*) からの借用形であることは明らかである。ちなみに、知里（1976）は樺太のタラントマリ集落において猫を表す形式として、ロシア語の猫の形式を借用した *kósika* という語があると述べている。樺太方言においても地域によっては、千島方言のようにロシア語の借用形を使用していたのかもしれない。

そして、アイヌ語において猫を表す形式がない、またはなかったとする方言も見られる。それらはアイヌ語北海道方言宗谷下位方言、アイヌ語北海道方言旭川下位方言、アイヌ語北海道方言名寄下位方言、アイヌ語樺太方言である⁷。

表2 アイヌ語諸方言の「猫」（服部 1964 : 185）

	ネコ型 ⁷	チャペ型	コスク型	形式なし
幌別 ⁸	<i>mekó</i>			
帯広	<i>nekó</i>			
八雲 ⁹	<i>nekó</i>	<i>cápe</i>		
沙流		<i>cápe</i>		
美幌		<i>capi</i>		
宗谷		<i>cáppe</i>		ずっと昔はいなかった
旭川				言わない（昔はいなかった）
名寄				ない
樺太 ¹⁰	<i>meko</i>			ない
千島 ¹¹			<i>kosuku</i>	

4. 猫を表す諸形式のアイヌ語への借用

図2では、表2で示したアイヌ語諸方言において猫を表す語の四つの型（ネコ型、チャペ型、コスク型、形式なし）の分布を示した。

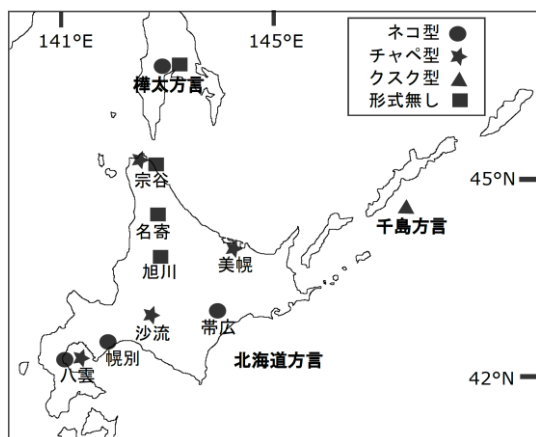


図 2 アイヌ語諸方言において猫を表す形式の四つの型

図 2 からネコ型とチャペ型の分布について考えてみるに、どちらかの型がどこかの一帯に集中して現れているわけではなく、それぞれの型は点在している。形式がないまたはなかったと答えた地域は、アイヌ語分布域の中でも旭川以北に見られ、北側に偏っている傾向がある。このうち、表 2 にあるようにアイヌ語北海道方言宗谷下位方言では、本来は形式が存在しなかったが、後に導入された形式としてチャペ型を用いていることになる。同様に、アイヌ語樺太方言においても、本来は形式が存在しなかったが、後に導入された形式として

ネコ型を用いたと考えられる。

形式がないまたはなかったとする地域がアイヌ語分布域の北側に偏っていることは、北海道に猫という動物がもたらされた流入経路が、その南に位置する本州からであったことを示唆する。まず北海道の南側に猫とともに猫を表す語（ネコ型とチャペ型）ももたらされ、北海道の南側から、猫と猫を表す語が広がっていったのだろう。アイヌ語千島方言だけは例外で、猫と猫を表す語は北海道から西に広がったのではなく、その逆の方向のカムチャツカ半島方面からロシア人によって猫がもたらされ、同時に猫を表す語としてロシア語から借用されたコスク型が、千島列島を南下しながら広まったのだろう。

本稿の目的は、アイヌ語北海道方言に猫を表す形式として見られるチャペ型が、日本語東北諸方言から借用されたことを示すことであつた。上述のように、猫を表す形式がないまたはなかった地域の分布の偏りや、これらの中で後にネコ型やチャペ型を導入した地域が見られることから、チャペ型は猫という動物の導入とともに、本州から北海道の南側に導入されたと考えられる。また、表 1 にあるように、日本語北海道方言函館下位方言にチャッペという形式が見られる。チャペ型は、日本語東北諸方言からアイヌ語北海道方言に借用された可能性もあるが、日本語東北諸方言から函館の日本人の間に伝わり、函館を介してアイヌ語北海道方言に借用された可能性もある。後者の場合、北海道の南端に位置する函館という土地は、本州の和人にとって北海道への玄関口の役割を果たし、一方北海道のアイヌ民族からすれば和人との接触の最前線であつたと考えられる。和人とアイヌ民族の接触における函館の重要性については今後の課題としたい。

5. チャペ型とネコ型のアクセント¹³

日本語からアイヌ語に借用されたチャペ型とネコ型について、それらの形式のアクセントについて考える。表 2 では挙げられた形式にアクセントの位置が付されている場合がある。チャペ型については、アイヌ語北海道方言八雲下位方言 *cápe*、アイヌ語北海道方言沙流下位方言 *cápe*、アイヌ語北海道方言宗谷下位方言 *cáppe* の形式にアクセントが付されている。どれも第一音節にアクセントがある。知里 (1985: 145-156) によると、アイヌ語では、多音節語の第一音節が閉音節（音節末に子音を持つ音節）である場合、第一音節にアクセントが置かれる。そして、第一音節が開音節（音節末に子音を持たない音節）である

場合、例外も見られるが、一般的には第二音節にアクセントが置かれる。このアイヌ語のアクセントの規則にのっとれば、アイヌ語北海道方言宗谷下位方言 *cáppe* は第一音節が *cap* で閉音節であるため、この規則に従うように見受けられる。一方で、アイヌ語北海道方言八雲下位方言とアイヌ語北海道方言沙流下位方言 *cápe* は、第一音節が *ca* で開音節であるため、第二音節の *pe* の方にアクセントが置かれるはずである。ところが、アイヌ語のアクセント規則に反して、第一音節にアクセントが置かれている。

アイヌ語北海道方言八雲下位方言とアイヌ語北海道方言沙流下位方言 *cápe* は例外的に、アクセントが第一音節に置かれている可能性もあるが、アイヌ語北海道方言宗谷下位方言も含めて、アイヌ語におけるチャペ型は、日本語東北諸方言のチャペまたはチャッペのアクセントをそのまま取り込んだためとも考えられる。松木（1982：269）において、青森県津軽方言におけるチャペの語のアクセントは第一音節のチャに置かれている。日本語東北諸方言および日本語北海道方言函館下位方言に見られるチャペまたはチャッペが第一音節にアクセントを持っていると仮定すれば、アイヌ語はチャペ型を借用した際、アイヌ語独自のアクセント体系に合わせるのではなく、借用元の語のアクセント位置をそのままに受け入れた可能性がある。

ネコ型については、アイヌ語北海道方言幌別下位方言 *mekó*、帯広下位方言 *nekó*、八雲下位方言 *nekó* の形式にアクセントが付されている。これらはどれも第二音節にアクセントが置かれている。借用元である日本語のネコでは、例えば東京方言において第一音節にアクセントがある。この場合は、チャペ型に反し、借用元のアクセント位置を受け入れず、アイヌ語独自のアクセント体系に合わせ、*meko* または *neko* は第一音節が開音節であるから、第二音節の *ko* にアクセントを置くようになったとも考えられる。しかしながら、借用元が日本語東北諸方言であったとすれば、チャペ型と同様に借用元のアクセント位置をそのままに受け入れたとも考えられる。本稿筆者（1970年代生まれ、津軽方言話者）の内省では、青森県津軽方言において猫を表す形式はネゴである。そしてこの形式は第二音節のゴにアクセントが置かれる。ちなみに、松木（1982：269-270）が同方言に見られるとするチャペまたはチャッペという形式を本稿筆者は耳にしたことがない。津軽地方においてはチャペ、チャッペが先にあり、後にネゴが導入され、両者が併存していた時期もあったが、次第にチャペ、チャッペが廃れ、ネゴが優勢になった様子がうかがえる¹⁴。

また、川内谷（1986）では、北海道の道南地域（函館を中心とした渡島総合振興局と、それに隣接し日本海側に位置する檜山振興局）における日本語北海道方言のいくつかの語彙のアクセントを、パターンごとに分類し地図上に分布を示しているが、その中に猫もある。形式としては *neko*、*nego*、*nejo* の3種類が挙げられている。アクセントは *neko* に限り、第一音節と第二音節に置かれる2つのパターン見られるが、*nego* と *nejo* については第二音節にアクセントが置かれる。第一音節にアクセントが置かれる *neko* は、日本語の標準的な方言など第一音節にアクセントを持っている日本語方言を取り入れた地域と考えられる。語中の *k* が濁音になっている *nego* は、日本語東北諸方言に特有の形式と考えられるだろう。残りの *nejo* は *nego* から変化したものと考えられる。本稿筆者の内省の限り、津軽方言に *nejo* という形式は見られないので当該形式が北海道に渡ってから鼻音化が生じたのではないか。本来 *nego* の *g* は音素 *k* が濁音化を経たものであるが、道南ではこの音素 *k* が音素 *g* であると再解釈されたのではないか。そのため母音間の *g* に起きる鼻音化が起き *ŋ* になったのだろう。

川内谷（1986）の挙げた地図上では、第二音節にアクセントを持つ形式の分布は、第一音節にアクセントを持つ形式の分布よりも圧倒的に広い。第一音節にアクセントを持つ形式は木古内町（渡島総合振興局）と、今金町とせたな町（ともに檜山振興局）の一部地域に局所的に見られるのみで、これ以外の地域では第二音節にアクセントを持った形式が見られる。

以上の状況から日本語東北諸方言において猫を表し、第二音節にアクセントを持つ形式のネゴが、道南地方の日本人の間に伝わり、そこからアイヌ語北海道方言に、アクセント位置はそのままに導入されたという伝播過程が考えられる。アイヌ語の子音には有声と無声の対立がないため、無声子音の *k* と有声子音の *g* を区別しない（知里 1985 : 124-125）。そのため日本語東北諸方言の *nego* がアイヌ語では *neko* となるのは、アイヌ語の音韻にかんがみれば不自然なことではない¹⁵。

6. おわりに

アイヌ語諸方言において猫を表す形式は、ロシア語または日本語から猫という動物とともに導入された。アイヌ語千島方言ではロシア語からの借用形式が見られ、アイヌ語北海道方言とアイヌ語樺太方言では日本語からの借用形式が見られた。日本語からの借用形式にはネコ型とチャペ型の2つがある。チャペ型は、橋（1936 : 262-263）が述べるように日本語東北諸方言からの借用と考えられる。本稿では、チャペ型の形式（チャペまたはチャッペ）が見られるのは東北地方の中でも青森県、秋田県、山形県に限られ、青森県を除き、日本海側に位置することを述べた。また北海道では函館にチャペ型が見られるが、これは恐らく青森県から津軽海峡を渡ってもたらされた形式である。太平洋側の岩手県や宮城県にはチャペ型の形式は見られない。青森県津軽方言においてチャペ型の語は第一音節にアクセントを持つ。アイヌ語がそれらからチャペ型を借用した際、アクセント位置もそのままに借用した。そのためアイヌ語におけるチャペ型は第一音節にアクセントを持つ。アイヌ語に借用されたネコ型の語は、第二音節にアクセントを持つ。これは第一音節にアクセントを持つ日本語（標準的方言）のネコとはアクセントが異なる。しかし、青森県津軽方言ではネゴといい、第二音節にアクセントがある。日本語北海道方言函館下位方言でもネコ型（*nego* または *nejo*）は第二音節にアクセントを持つ。そのためネコ型も、日本語東北諸方言から北海道の南側に導入され、そこからアイヌ語へと広がっていった可能性があるだろう。ただネコ型については日本語諸方言を広く見渡した議論をしたわけではないため借用経路の詳細な分析については未だ課題が残されている。

注

* 本稿は北海道民族学会 2021 年度第 1 回研究会（2021 年 6 月 27 日、オンライン開催）における研究発表を発展させたものである。研究発表の場において、ご意見をくださった方々に感謝する。特に、阪口諒氏には研究発表の場において、そしてその後の私信によってご助言いただいた。また、本稿に対し詳細なご助言をいただいた査読者お二人にも感謝する。ただし本稿の不備は筆者にのみ責任がある。

¹ 橋（1936）はチョンチョンのような重複語の場合、後部の重複要素を表す文字として「く」を用いている。本稿ではこの文字を用いず、重複した部分もチョンチョンのように書き表している。

² 徳川（1989）における表記はひらがなを用いているが、本稿では日本語諸方言の語彙の形式を表す場合はカタカナを用いることで統一している。

³ 津軽方言の「猫」において、接尾辞には「ペ」と「ッペ」の間で揺れが見られる。また、(1) に類

例が見られる。チャコ（秋田、山形）とチャッコ（秋田）である。これも「コ」または「ッコ」は指小辞だろう。津軽方言と秋田方言のこれらの接尾辞では、促音ではない形式と促音の形式の間で揺れるが、これらの方言において両者が自由交替形と考えられているのかもしれない。この点については今後の課題としたい。

⁴ これに関連し、Hayward (1889) は様々な言語における動物への呼びかけ語についての論考であるが、その中に日本語において猫へ呼びかける語も挙げられている。その中で “In Japan cats are called by the word *ko-zo*, *ko-zo*, which means “little priest.” と述べている (Hayward 1889 : 107)。ここに挙げられた *ko-zo* という猫への呼びかけ語は、佐藤 (2004) に猫を表す形式として挙げられ、千葉県東葛飾郡で用いられるとされるコゾという形式に違いない。Hayward (1889 : 107) の分析が正しければ、コゾは「小僧」から来ていることになる。コゾは猫を呼び寄せる語でもあるという点で、形式は異なるがチャペなどの語と類似している。チャペまたはチャッペには「小さい」を意味する要素が含まれるが、コゾもそうである点が共通している。

⁵ 村山 (1971 : 109) にはアイヌ語千島方言（北千島）における「猫」の形式として *masar* が挙げられている。アイヌ語樺太方言の形式として上述の *masar* と同一の形式と見なせる *masara* が挙げられている（語末の母音 *a* は子音 *r* の直前の母音の反響母音だろう）。それぞれ Dybowski (1891) と Dobrotvorskij (1875) からの引用とのことであるが、この *masar(a)* という形式の由来は不明である。

⁶ 吉田 (1984 : 60-61) ではアイヌ語の *meko* 「猫」が *mek* という擬声語（猫の鳴き声）に由来すると述べるが、猫の鳴き声の語尾に *k* のような閉鎖音があるように聞き取る言語は世界の言語を眺めても稀だろう。

⁷ ネコ型、チャペ型、形式なしの3つの型に関連して、橘 (1936 : 272) は以下のような金田一京助の見解も紹介している。「猫はアイヌに入ったのは新しいことで、もとになかったものです。故にチャペは秋田方言を取入れて使っているもの。メコはネコの *m n* 互換です。」

⁸ 知里 (1976) には、釧路の春採方面における「猫」を表す形式として *méekot* が挙げられ「寒さで死ぬるもの」(*me* 「寒さ」、*ekot* 「～で死ぬ」) との注釈がつけられている。これは知里 (1976) が民間語源（一般に流布している語源であるが正しい語源であるとは限らないもの）であると述べている。さらに説明を加えると、春採地方のアイヌ民族によって、日本語からの借用形である *meko* 「猫」が、猫が寒さに弱いという特性を基に再解釈されて、音声的に類似している形式である *me-ekot* という語が二次的に生じたのだろう。

⁹ 知里 (1976) によると、胆振・日高地方には「猫」を表す形式として *mekó* の他に *čápe* という形式も見られるようである。表 2 における諸地域のうち、胆振・日高地方に属するのは幌別と沙流である。表 2 によると、幌別下位方言と沙流下位方言のそれぞれに両方の形式が見られるわけではなく、幌別下位方言に *mekó* が、沙流下位方言に *čápe* が見られる。

¹⁰ 北海道方言八雲下位方言の形式として *erumkoykip* (直訳「鼠を殺す者」) も挙げられているが、この形式は「猫」を説明的表現法で表したものである。そのため、本稿の考察対象に含めない。

¹¹ 樺太方言にはこのほかに *taytay* も挙げられている。服部 (1964 : 185) において、この形式には「ぶち、みけ」との補足事項が挙げられていることから、特定の模様をもった猫を指したらしい。この *taytay* の語源は不明である。

¹² 服部 (1964 : 185) における千島方言の形式は鳥居 (1903) からの引用である。

¹³ 橘 (1936) で日本語東北諸方言からアイヌ語への借用形式が紹介され、さらに本節でネコ型やチャペ型の形式も東北諸方言からアイヌ語へ借用されたと述べているように、アイヌ語に借用された形式は日本語東北諸方言からのものが多いようである。一方で、知里 (1985 : 156) は、アイヌ語における *kani* (金属)、*tuki* (酒杯)、*sipo* (塩)、*pachi* (鉢)、*pitu* (櫃)、*wosa* (箆) は日本語からの借用語であり、アイヌ語本来のアクセント規則に従えば第二音節にアクセントを持つが、それに反しこれらは第一音節にアクセントを持つ。これらの語は北前船などによって関西方面の品物が持ち込まれた際に、関西方言とともに導入されたのだろう、と述べている。単にアイヌ語における日本語の借用語といっても、異なる地域の日本語諸方言から借用された経緯があったようである。

¹⁴ これに関連して、図 1 にあるように山形県庄内地方は猫を表す形式としてのチャペが分布する地域であるが、中田篤氏 (私信) は山形県の鶴岡 (庄内地方) でチャペという形式を聞いたことがないとのことである。このことから津軽地方と同様に庄内地方でもチャペという形式が廃れていった様子がうかがえる。

¹⁵ 東北諸方言のベゴ (*bego*) がアイヌ語では *peko* 「牛」として借用された例もある。

引用文献

知里真志保

1976 『知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典：植物編・動物編』平凡社、東京.

1985 『アイヌ語入門—とくに地名研究者のために—』北海道出版企画センター、札幌.

Dobrotvorskij M. M.

1875 *Ainsko-Russkij Slovar'*, Kazan.

Dybowski B.

1891 *Słownik narzecza Ainów, zamieszkujących wyspę Szumszu w lancuchu Kurylskim przy Kamczatce* (Dictionary of language of Ainu living in the island of Shumshu in the Kuril chain near Kamchatka), Nakł. Akademii umiejętności, Krakow.

Fukazawa M.

2019 Ainu language and Ainu speakers. In P. Heinrich and Y. Ohara (eds.), *Routledge handbook of Japanese sociolinguistics*, Routledge, London, 3-24.

川内谷繁三

1986 『道南方言の研究—言語地理学的調査とその解釈—』北海道方言研究会、札幌.

風間伸次郎

2021 「八丈型基層言語と日本語の重層性」『日本言語学会第 163 回大会予稿集』日本言語学会、京都、360-365.

服部四郎（編）

1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店、東京.

Hayward S.

1889 Terms used in calling domestic animals. *American Anthropologist* 10(4): 97-113.

松木明

1982 『弘前語彙』弘前語彙刊行会、弘前.

村山七郎

1971 『北千島アイヌ語：文献的研究』吉川弘文館、東京.

佐藤亮一（監修）

2004 『日本方言辞典：標準語引き』小学館、東京.

橘正一

1936 『方言學概論』育英書院、東京.

徳川宗賢（監修）

1989 『日本方言大辞典：下巻』小学館、東京.

鳥居龍蔵

1903 『千島アイヌ』吉川弘文館、東京.

吉田巖

1984 『アイヌ史資料集：第二期第二巻』北海道出版企画センター、札幌.

(おちあい・いずみ／室蘭工業大学)